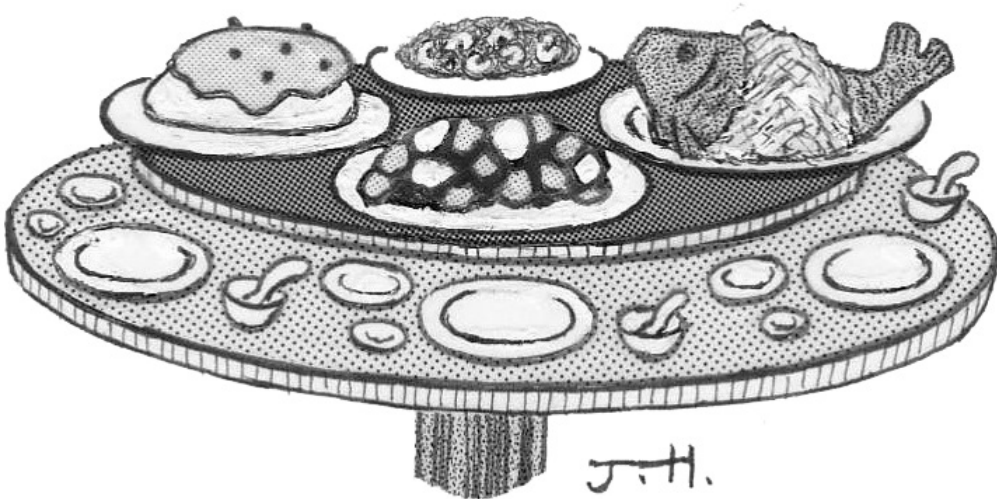


味の記憶

# 酢豚と「スベタ」

—文学と食を愛するハイパー編集記者・ぼのぼ氏の、  
わくわくエッセイコラム。忘れられない子供時代の味の  
数々と共に、昭和の悪ガキがよみがえる！



●竹久夢二の美人画に  
出てくるような美女

山本富士子といえばミス日本に輝く大映を代表するスター女優。最初は役に恵まれず、時代劇では悪家老に無理やり手籠めにされそうになる娘役や、現代劇でも悪徳社長に無理強いを襲われそうになる未亡人役など多かったが、そんな作品をあの「わかば館」でしこたま観ていた私である。

〈あれま、何をなされます〉

〈ういやつ、まあよいではないか〉

〈そんなご無体を、いけません〉

〈うぬぬ、観念しろ、わるいように〉

〈せん、言うことを聞くのじゃ〉

〈あれ、ひえっ〉

と、修羅場のやりとりをしていると、ヒーロー長谷川一夫が飛び出してくる。このあでやかな美女の危難を救うという構図。いや、たまりませぬ。

私は昨夜観た映画をおさらいするかのように、陽だまりの縁側の干し布団の上で、一人二役、三役を演じていた。するととつぜん、

シャナリシャナリ、

うふっ、うふふん。

そんなエコーが聞こえてきそうな、竹久夢二の美人画に出てくるような着物姿の瓜実顔の女性。土手にかかる丸木橋を渡ってこちらに向かって歩いて

くる。残念ながら山本富士子とはいかないが、近づくにつれブーンと漂う化粧のおいととも、少し崩れかけた色気を辺りに振りまき、縁側越しに私に声をかけてきた。

「あらっ、ぼっちゃん？」

「えっ……」

日頃ぼっちゃんといわれることなど

ない私は、とまどいぎみ。

「家の人は？」

「いない」

「あの人、今日は休みと聞いたけど

……仕方ないわねえ」

と彼女が一人つぶやく。

「じゃあ、これをお母さんが帰って

きたら、渡してくれる？」

自分の小さな和紙の名刺を手提げ袋

から取り出して、そこに走り書きして

差し出した。

「あつ、うん」

「じゃ、お願いね、先生にもよろしくね」

そう言い残して、彼女は来た道をす

たすたと帰って行った。「小股の切れ

上がった」とか「柳腰」とはこういう

のを言うのだろう。もともと、そうし

た形容を当時の私を知るべくもない

が、辺りに振りまく色気は尋常ではな

い。のどかな公務員宿舎の空気をかき

乱すには十分であった。

しばらくポカーンとして彼女の後姿

に見入る私。名刺に目を落とすと、数

字と簡単なメモがついていた。保育園にも幼稚園にも通っていなかったので、数字も文字も読めないが、何か我が家に波風を立てそうな不吉なものであるということくらいはわかる。ましてや今、彼女は父のことを「あの人」といった。ただならぬ関係ということはおよそ察しが付く。子供だと思つて油断したのでだろうが、色ごとに関することは誰に教わらなくとも5、6歳ともなればかぎ分けるもの。わかば館で映画の濡れ場をさんさん観てきたこの私が聞き逃すわけがない。さて、母親にどう伝えたものやら……。

ちょうど月末のこと。我が家には、勘定書きをもった酒屋のおじさんとか米屋のお兄さんなどがひっきりなしにやってきた。つけ払いが効くご時世、父の給与日を当てにしているのだ。ところが我が家では、父から母に給与がほとんど渡らないことも度々であった。そんなとき、母は居留守をつかい、幼い私に対応する。

「だれも、いないよ」

すると相手はあきらめて、勘定書き

だけおいてすぐ帰っていくので

ある。

当時、労働組合の運動にのめりこんでいた父は、同僚たちとの飲み会でスッテンテンになることも珍しくなかった。見栄っ張りだからみな奢ってしまった。稼いだ給与は、たちまちの

うちに公務員にしては分不相応の贅沢な店で飲み代に化けていく。

台湾からの引き揚げの後、宮崎に持っていた土地の大半は、国とGHQがすすめた農地改革により安価な金で収用されたが、その金はほぼ、父の飲み代に消えたらしい。戦争のため音楽で身を立てる夢も終いえ、追い打ちをかけるように家族の不幸などが折り重なり、長男として双肩にかかる重圧に耐えきれず自暴自棄になっていたのだろう。元来坊ちゃん育ちで、エラそうな割にはいざという時の決断ができず、優柔不断などころがある。

一方で、口達者でダンスが得意、ピアノやクラリネットなどの軽音楽もこなし、夜遊びの場では人気者だったようだ。結婚しても夜遊びはあいかかわらずで、浮いた話もちらほらあったようだが、不思議なのは、本来旧家のお嬢様育ちの母がよく堪忍袋の緒を切らずにいたことである。おそらく子供がいたからだろうとは思うが、まあ、昭和元年生まれの女性としては、忍耐を美德とする価値観が強かったのだろう。

### ●御前様の屋敷に、 目当てはカルピスと羊羹

私がどう伝えたものか思索していると、母が買物から帰ってきた。

その名刺をしばらくじつと見て、母が私に問いかけた。

「何か言ってた？」  
「いや何も、ただ渡してって」  
「そう、……」

そのときはそれで話が終わった。それから数日が経ち、久しぶりに宮崎市街に母と二人で出かけることになった。母が少女時代に一時期過ごした養父母宅を訪ねたのだ。母は、まだ3歳になるかならないかの頃に実母を亡くした。年の離れた兄が3人いる未婚だったが、下の妹の出産で肥立ちが悪く、母子ともに命を落としたのだ。遺された男親一人では幼い娘の面倒は無理ということで、しばらく親戚の家に預けられた。その養父母の家を訪れたのだった。

養父はもう隠居していて、屋敷は宮崎神宮の西手にあり、宮司もやっていらしたらしい。近隣では「御前様」と呼ばれていた。戦前の一時期、宮内庁に勤務して天皇の近従として仕えていたこともあり、そのためついた呼び名だった。養母はすでに他界し、二人が母の後に養女に迎えた娘が御前様の世話をしていた。母にとっては実のハトコにあたる。

御前様と母が回り廊下の突き当りにある離れの間でひとしきり話している間、私は南側の庭に面した控えの間で、カルピスと羊羹のご馳走にあずか

る。それがこの屋敷を訪れるときの唯一の楽しみであった。その控えの間から望む広大な庭園には芝生が敷き詰められ、錦鯉が泳ぐ池の周りには大きな庭石や灯籠、鹿威しが配置されていた。だが、子供にはその佇まいはあまりに静かで退屈であった。

母のハトコにあたるおばさんは茶と琴の先生をしている。母も娘時代には琴を習っていたので、久しぶりに会って二人で連弾するのを楽しみにしていた。御前様と母の面談の後、このおばさんが皆に茶を入れて一服するのがお決まり。そして、三人で少女時代の思い出話に花が咲く。幼い私にも抹茶を煎れてくれるのだが、苦くて堪らず、口直しの羊羹に食らいつく。島田省吾に似た風貌の御前様を前に琴の連弾が始まると、おのずと私も正座して聞く他はなく、帰る頃にはきまって足が痺れて立てなくなるのだが、母はいつも楽しげだった。数少ない気晴らしだったのだろう。

いま思えば、母方の祖父が亡くなってからはこの御前様が母の後見役のような存在で、父が家計に給与を入れないときの駆け込み寺であったのだ。母としても、いくら養父とはいえ遠慮がある。できることなら、そんな用で訪れたくはない。しかし、たまに母が訪れると、御前様はそれとなく思いやっけて、いくばくかのまとまった金子を

母に手渡していた。そんなことに興味のない当時の私は、そこで供される羊羹がひたすら楽しみだった。甘味が何とも言えず、ことのほか美味しかったのだ。おそらく母にとつては、少しほろ苦くしょっぱいものであったであろうが。

### ●広瀬の上原謙

にもかくにも、件の美女が現れて

以来の家計のピンチは、御前様の懐金によつて無事乗り超えた。そんなごたごたがあつてから1か月ほど経つた頃、我が家に珍客が現れた。父は酔つた勢いで、夜とつぜん飲み友達を連れて帰ることがある。その相手をする母は大変だが、子供たちは珍客に興味津々である。きょうの珍客は知る人ぞ知るおかまの先生。ちよつと見は「広瀬の上原謙」と評判の英語の先生だ。

この先生なかなかの文学青年で、酔うとアーネスト・ヘミングウェイやヘンリー・ミラー、ノーマン・メイラーがいかに素晴らしいか、熱っぽく語りだす。子どもたちには正直ちんぷんかんぷんなのだが、その情熱だけはひしひしと伝わってくる。もともと文学少女だった母だけがその話についていく。映画にもうるさくて、その話題になると、映画好きな父も論議に加わる。今日のお題はハンフリー・ボガートと

イングリット・バーグマン共演の「カサブランカ」。男と女が交わす洒落た会話の妙をとくとくと語っている。

初めのうちは先生もまだシャキッとして「広瀬の上原謙」を演じているが、酔うほどに、だんだんお姉言葉が入ってくる。もちろんそれはごく親しい気を許した相手にだけ見せる顔なのだ。だが、男女の会話の妙に話題が転じたところで、

「実はねえ」

と先生はいよいよ今日の主題に入る。自分が抱えているお悩み相談である。そのために父に連れられ、我が家を訪れたのだ。

「ある女に言い寄られているの、わたし」

と上原謙が言う。

「ほうー」

と父が答える。

「あんたたち、もう遅いから寝なさい」

と母が慌てて子どもたちを促すが、「いや、みんなに聞いてほしいのよ、そんないやらしい話じゃないから」と上原謙にそこまで言われたら、母も引き下がるしかない。

へしめしめ、これは面白くなってきたぞ」

私たちは目をらんらんと輝かせ、身を乗り出して聞く態勢に入る。

「わたし女生徒や母親、女性教師か

らよくラブレターをもらうことは先生も知ってるでしょ。でも、それは丁重にお断りして相手も納得してくれるのよ。でも、今度の相手はそんなことでは引き下がらないの」

「俺の知ってる女性か？」

と父が訊く。

「先生もよく知ってる女性」

「誰？」

と一斉に我が家の者たちが声をかけた。

「ほら、『小料理屋たまき』の女将よ。先生に連れられて何度か行つたでしょ」

「あ、うーん」

と、少し極まりが悪そうにうなずく父。

「この間、名刺で渡された請求書の店ね」

母がいくぶんか尖つた声で答える。

「あら、そんなことがあつたの？」

と、ちよつとしまったという顔をする上原謙。

その女性こそは、先日私が出つた美女である。ちなみに「たまき」という名前は、あの竹久夢二の最初の妻の名前である。今にして思えば、竹久夢二の美人画の女性のような風情をしていたのも頷ける。やはりそれを意識してというか、憧れていたのだろう。だが、兄サダオも姉マキもその女性には会っていない。事のあらまは私か



ら伝え聞いているけれども、どれほど  
只ならぬ風情の女性か、もうひとつピ  
ンと来ていないようである。

「で、その女将がどうしたの？」  
と、母が畳みかける。

「霧島温泉に一緒に行こうとしてこ  
く誘うのよ」

「そりゃ下心丸出しやね」  
と呆れたように受け答える母。

「温泉につかるくらいならいいじゃ  
ないか。一緒に入るわけじゃなし」  
と父が間抜けて口を挟む。

「絶対いやよ、男風呂に入るのよ。  
知らない大勢の男がいるなかで自分  
の裸を見せるなんて、恥ずかしくて  
死んじゃう」

「あっ、そうか……」  
父は上原謙の中身が女性であること  
を改めて再認識したようだ。

「だいたい同部屋になったらどうす  
るの、私がゲイだってばれちゃうで  
しょ」

と上原謙が反論する。  
「その女だと言いつらすかもしれな  
いしね」

と母が剣呑に相槌をいれる。  
——とまあ、その夜のお悩み相談  
は、どうやってその誘いを断るかで、  
その作戦を父と母、上原謙の3人であ  
れこれと練り出した。そのあたりにな  
ると、私たちもさすがに眠たくなって、  
寢床についた。

チチチ・チ：

鳥の鳴き声で、私は目が覚めた。父  
と兄、姉はもう出勤、登校したらしい。

しかし、上原謙はまだ家にいた。彼は  
この日は有給休暇をとつたらしい。浴  
衣の襟口から肩口にかけて、もる肌を  
露わにして、母が使う化粧台の三面鏡  
をのぞきながら、その背中に白粉を塗  
っている。何ときめ細やかで白い肌で  
あることか。私とその姿を後ろから興  
味深げに覗いていたら、三面鏡で見と  
めた彼が、

「あら、おはよう、セツちゃんもや  
つてみる？」

と化粧台に誘つてきた。  
「こうやって塗ると、まるで、女の  
子みたい。かわいいわあ」

「ついでに少し紅をさしてみましょ  
うね」

と私の唇に口紅をつけてくれた。も  
ちろん母の使うポーラ化粧品である。  
うっとりして三面鏡に見入る私。

すると、洗濯を終えた母が戻つて  
きた。  
「何しているの、だめよ先生、この  
子に変なこと仕込んで」

「あら、ごめんなさい。あんまり可  
愛いもんだから、つい悪乗りしちゃ  
つて、ホホホ」

私は化粧されて、ぞくぞくとするよ  
うな快感をその時に初めて味わった。  
そして、上原謙が我が家を辞した後も、

鏡の前で一人うっとり余韻に浸つて  
いたのである。

考えてみたら、私は料理好きだし  
母の裁縫や編み物を手伝うのが大好き  
で、小学校の家庭科の時間が何より楽  
しみであった。もし、母にその趣向を  
否定されずに大きく伸ばしていたら、  
ひよつとしたら今とは違う人生を送つ  
ていたかもしれない。

### ●「絹小路」の酢豚

上原謙のおかげで「請求書事件」が  
蒸し返され、さすがの父も形無しであ  
る。少しは母に悪いと思つたのか、給  
料日に家族皆を宮崎市街の高級中華料  
理店「絹小路」に連れて行った。

この店は巨人軍のキャンプ時には長  
嶋さんや王さんも通つたという県内指  
折りの名店で、料理の味は折り紙付き。  
店主は大の巨人軍ファン、宮崎の巨人  
軍の後援会にも入つていた。この店の  
経理を父方の叔母がやっていたことも  
あり、我が家のお祝い事では何かと縁  
のある店だった。中央通り繁華街の中  
心部にあつたが、残念ながらずいぶん  
前に閉店してしまつた。叔母もとつく  
に他界している。今は昔の話である。

ともあれ、この店のフルコースは絶  
品だ。北京料理がベースで、八宝菜に  
チンジャオロース、酢豚、ジンギスカ  
ン鍋、なまこのネギ煮込み、北京ダッ

ク、魚揚げの酢入り辛味あんかけなど、ほつぺたが落ちる。

母と私、姉が店に到着すると、すでに兄が入っていた。一時期叔母の家から市内の学校に通っていたのでしばらくぶりの再会である。まもなく父も合流した。

皆が揃うや否や、個室の大きな円テーブルの中段に、次々とコース料理が運ばれてくる。酢豚やチンジャオロースは日本のオリジナル料理だが、それだけに幼い私でも食べられる好物。とりわけ私の目当ては酢豚だ。姉はチンジャオロースが好物で、兄は何でもイケイケである。したがって、強敵はやはり兄。油断していると、上段の円テーブルをぐるりと回し、あつという間に酢豚を横取りされてしまう。早くもテーブルに手をかけている兄、母も手をかけ、その動きを制御し、それぞれの料理を皆に均等に小皿に盛っていく。

モグモグモグ

やっぱりこの味。甘酸っぱい酢豚の味が口の中に広がる。私は体が小さいから、そんなにどれもこれも食べられるものではないが、円テーブルにこれでもかと色鮮やかに食彩が並ぶと、幸せな気分になる。目を楽しませてくれるのだ。

皆であらかた食べつくし、デザートの杏仁豆腐を食べながら一服。個室

といつてもドアは開けてある。他の客の出入りも見え、店内は活気にあふれている。と、そこに何と、件の女性が現れた。「小料理屋たまき」の女将である。

「あら、先生、ご家族で？ 奥様ですか、先生にはいつもお世話になっております」

「こちらこそ、主人がご迷惑をおかけしてはいないかと」

母は初対面である。笑顔をとり繕いながらも、「この女か」と値踏みをするような鋭い目つきがのぞいてしまう。互いの視線がバチバチバチと火花を散らしている。

「あら、ボクも一緒なのね、口の周りにケチャップつけて可愛いこと」と女将が私に声をかける。

「酢豚食べたんですよ。ここの酢豚は最高よね。私も大好きなの」

「あん人か、上原謙に言い寄つとるのは、えらく別嬪じゃが」

と兄サダオが私に小声で呟く。

「何言いよると、あれはあばずれじやが」

と今度は姉マキコが囁く。

すると、大柄の恰幅のいい男性が後ろから顔を覗かせた。

「何しちよると？ 知り合いか」

「ううん、店のお得意様」

「それは失礼しました。たまきがお世話になってます」

と男性がお辞儀する。どうやら女将のパトロンのようである。

「いやあ、こちらこそ」

と父が鷹揚に返す。

「先生、たまにはご家族でいらして。

みなさまごきげんよう」

と女将は言い残し、男性と立ち去った。

宮崎で「ごきげんよう」という言葉はまず使わない。それこそ気取り澄ました「かぶれ」と揶揄されるのがオチだ。

「英語先生にもちよつかい出して、いい気なもんね」

母が低い声で呟いた。

「酢豚が好物というけど、あれは『スベタ』やね」

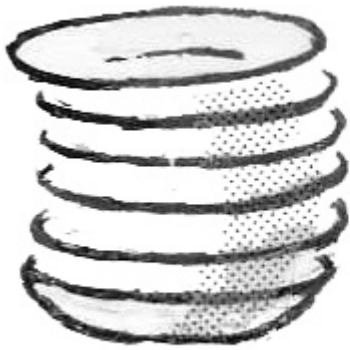
そのダジャレを父は無表情に聞き流す。せつかくのごちそうの味が台無しにならないように、家族皆で久しぶりにオールナイト映画を観に行くことにした。

市内のスカラ座ではちょうど黒澤明の「天国と地獄」が上映中であつた。スリリングな展開の映画に、いましがたの不慣れた出来事の記憶などすっかり消え失せ、母の機嫌も直つていた。父も心なしか嬉しそうである。兄はさっそく声色を使つて三船敏郎が扮する父役のセリフをしゃべりだす。私は仕方ないので、誘拐された子どもの役になつて兄の相手をする。姉は呆れた顔を

しつとも楽しそうに笑っている。

とまあ、一家賑やかに日の丸タクシーで帰路に着く。やはり、映画は偉大である。

それから3か月後、今度は淡路恵子似のスナックのママが請求書をもって我が家を訪れた。対応したのはもちろん私である。二度あることは三度ある世の習い。母にとっては、この先第二、第三の「スベタ」が現れるのであった。(終)



丁州.